

國學院大學學術情報リポジトリ

「さればが含蓄されて居ると見れば」：
助動詞「らむ」の語法をめぐる批判史覚書

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 色川, 大輔 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000930

「さればが含蓄されて居ると見れば」 ―助動詞「らむ」の語法をめぐる批判史覚書―

色川 大輔

キーワード…助動詞「らむ」、「旧説」、「新説」、松尾捨治郎、学説批

判史

一、はじめに

桜の花のちるをよめる

きのものり

久方のひかりのどけき春の日にしづ心なく花のちるら
む（『新編国歌大観』編集委員会編『新編国歌大観』

第一巻 勅撰集編 歌集』角川書店、昭和五八年二月）
一二頁）

右の歌を人口に膾炙した例とする助動詞「らむ」の一種の語法についての研究が、助動詞「らむ」の語法研究史における大きな部分を占めることは、助動詞「らむ」の語法

研究史を振り返って見ると窺えるものである。

この語法をめぐって、「新説」と称せられる語法説が一時期論議の対象になったことがあった。その語法説は、その後多くの批判的研究により乗り越えられた観がある。そのため今日では顧みるものも稀であるが、助動詞「らむ」に係る過去の研究史を振り返ると目にすることが避けられない語法説の一つである。

多くの批判は継承されており、助動詞「らむ」の語法について検討しようとする者にはその批判史を含めて知られているものであるが、その批判学説史は未整理である。助動詞「らむ」についての研究文献を集めているうち、「新説」に対する批判史を整理したい欲求に駆られた。ここではそ

の取っ掛かりとして、解釈出来ないといわれる用例について集め、また、管見の範囲の先行研究に見える問題をまとめる次第である。

二、「旧説」の概要

「旧説」とも称せられることのある、近世以前から存在する伝統的解釈説がある。この解釈説を語法説に位置づける際に、どのように説明するかということが、「新説」をも含む助動詞「らむ」の語法学説史の大きな主題の一つであったとも言える。その大体を、まず北村季吟『八代集抄』と有賀長伯『春樹顯秘増抄』を借りて示す（以下、引用文の表記については、私に改めた箇所がある。傍線等飾りについては、文中特に断らない限り原文ママ）。

北村季吟『八代集抄』

空のひかり長閑なる春の日に何としてしつかなる心もな
くちるらんといへり（『北村季吟古注釈集成25 八代

集抄一 古今集上』〈新典社、昭和五四年四月〉

一五二頁頭書。傍線は引用者

有賀長伯『春樹顯秘増抄』

是ハ春日といふ下へなにとてと入て聞ことふかき口伝
也（根来司解説『姉小路式・歌道秘蔵録・春樹顯秘抄・
春樹顯秘増抄』〈勉誠社、昭和五二年二月〉一六八頁・
一六九頁。傍線は引用者）

文中に存在しない「何とて」という疑問副詞を伴う表現を補って解釈するものである。解釈説と極めて近接したものであることは、てにをは研究書である『春樹顯秘増抄』に見えることから窺える。

この解釈説が助動詞「らむ」終止の文としては解釈に難渋する文を対象として主張され、その解釈説を語法説上に位置づけようとするところに由来するものであり、語法説と呼ぶには解釈説の色彩が濃い。「新説」もまたその批判説も同様の色彩を抱えていることが多い。後に見るように解釈文法の大立者である佐伯梅友が再三にわたりこの語法について論述し、「新説」批判を論じていることは、解釈説の色彩が濃いことを裏付けるようにも思えるのである。

三、「新説」の概要―松尾捨治郎説を例として―

本稿で言うところの「新説」は、研究史上実際に「新説」

と呼ばれたこともあるものである。近代国語学史において形成された語法説であり、主張した人物として、三矢重松・松尾捨治郎・時枝誠記・築島裕が挙げられたことがある。

各々に解説の語法や用語法に相違があり、また、同一の「新説」を唱えたかどうかについて議論のありうる人物もいる。本稿では「新説」の理論主張をしたものとして多く批判の組上に上がり、大方が認めるであろう人物として松尾捨治郎の所説を以て代表させ、掲出することとする。松尾捨治郎が「新説」主張の代表的人物であるか否かの議論も必要であろうが、本稿では省略する。

松尾捨治郎の主張した「新説」は、『国語法論攷』および『助動詞の研究 自他の対応を中心として』の二著の中に見ることが出来る。

松尾捨治郎『国語法論攷』（文学社、昭和十一年九月。本稿では白帝社刊昭和三十六年一月追補版を使用した）に見えるのは以下のものである。

詞の玉緒には

時鳥我とはなしにうの花のうき世の中になきわたるらむ。

わかれてふことは色にもあらなくに心にしみてわびしかるらむ。

心ざし深くそめてし折りければ消えあへぬ雪の花と見ゆらむ。

及び「久方の光のどけき春の日に」の例歌等を特異な者と見て、「かなの意に通ふらむ」と説いて居るが、此も疑問の語が無いのを怪しんだので、矢張姉小路流に、らむは疑問文に用ゐられるのが本体だと考へたからの説である。しかし なにとて など さらずはなど 等を省くといふ説の、肯定し難いことは勿論、らむをかなの意に見るのも首肯出来ない、此はらむの上の動詞の表す事実 花の散る 鳴きわたる 等が明かに分つて居るのに、何故にらむを用ゐたかに迷はされたのであつて、此等の用例には、らむのついた動詞の表す事実以外に、別に不明な事が存在するのを忘れての解説である。（七一〇頁）

上欄の事実は明かであつて、下欄の事を疑つたのであるが、其の表現手段としては、富士谷流の所謂情の緩急による転置や和歌音数の制限等の為に、上

欄の語にらむを附けたのである。(七一頁)

原著の図示の再現が出来ないが、「上欄」は「花の散る」、「下欄」は「しづ心なく」であるとしている。

松尾捨治郎『助動詞の研究 自他の対応を中心として』(文学社、昭和一八年二月)には以下のように見える。

説明体のらむが其の想像焦点を附属句の方に移動させる此の用法が、らむの機能發揮の極致である。かういふ用法は何時頃からかといふに、早く万葉集に次の三例を認める。

桜花 さくらばな 時 とき 有 あ 雖 いふ 不 な 過 と 「見人之 みんひと 恋盛常 こひのかりと」 今之 いまし 将落 ちるらむ

(万葉一八五五) 82

「東細布 あづくもの 従空延越 そらよひきこし 遠見社 とほみこそ」 目言疎良米 めことかるらめ 絶跡 たゆと

間也 まや (同二六四七) 83

「母毛豆思麻 安之我良乎夫禰 安流吉於保美」

目許曾可流良米 己許呂波毛倍杼 (同三三六七)

84

此等は、桜花散る 目言かる 目かる 等の事實は、明かであつて、唯其の原因たる「内が不明なのを、疑惑的に想像したのであるが、疑問体ではない。

(一八六頁・一八七頁)

説明体の(乙)(四)は、万葉には、前掲の82 83 84の三首にすぎないが、古今には次の十三首ある。何れも「」が不明なのである。

「心ざし 深く染めてし をりければ」消えあへ

ぬ雪の 花と見ゆらむ 87

久方の 光のどけき 春の日に「静心なく」花の 散るらむ 34 再出

「時鳥 我とはなしに」うの花の うき世の中に

なき渡るらむ 88

「秋萩に うらびれをれば」足引の 山下とよみ

鹿のなくらむ 89

「吹くからに 秋の草木の しをるれば」うべ山

風を 嵐といふらむ 90

「秋の露 色々ことに 置けばこそ」山の木の葉

の 千草なるらむ 91

「龍田姫 手向くる神の あればこそ」秋の木の

葉の 幣とちるらむ 92

○「わかれてふ 事は色にも あらなくに 心にし

みて」わびしかるらむ……………93

「心から 花のしづくに そぼちつ、」 うぐひす

とのみ 鳥の鳴くらむ……………94

○「あさみこそ」袖はひづらめ 「涙川」 身さへ流

ると 聞かば頼まむ……………95

○「故郷に あらぬものから 我が為に」 人の心の

あれて 見ゆらむ……………96

「うき目のみ 生ひて流る、 浦なれば」 かりに

のみこそ あまはよるらめ……………97

「我身から うき世の中と 嘆きつ、」 人の為さ

へ 悲しかるらむ……………98

右の中○印三例は、想像焦点が句に移ったかを疑ふ人もあらうが、「事が心にしみての故ならむ」「涙川が浅き故ならむ」「斯く荒れたる如く見ゆるは、我が為に人の心の流れたる故ならむ」と解して、決して妥当を欠きはしない。(一八八頁)

助動詞「らむ」の上接動詞が述語となる句が推量対象を含むとは思えないような文であっても、助動詞「らむ」から隔たった文中の条件句などの部分をその推量の対象とする

機能があるとすることは、助動詞「らむ」の語法の把握として、大方の了解を得ていると思う。

「新説」とは、なおかつ、この語法により、同一文中に推量対象を持たない助動詞「らむ」は存在しないと認めることが出来ると考える語法説ないしは解釈説であると捉えるのが一般的な把握の仕方の方である。

四、「新説」では解釈出来ないとされる用例

ここでは、「新説」では解釈出来ないとされる用例を整理してみた。本文は、勅撰和歌集については「新編国歌大観」編集委員会編『新編国歌大観 第二巻 勅撰集編 歌集』（角川書店、昭和五八年二月）の本文を、私家集を引くものについては原論文の記述をそのまま掲出した。用例に新編国歌大観番号のみを付しているものは『古今和歌集』の用例である。『古今和歌集』の用例については、多くの論考が挙げており、論考間で同じ例を認定していることが多いことから、以下に一括して用例本文を挙げ、各論考見出しの中では、新編国歌大観番号のみを掲げた。

花の色のいたりいたらぬさとはあらじさけるさかざる

花の見ゆらむ（九三番）

わがやどにさける藤波たちかへりすぎがてにのみ人の
見るらむ（一二〇番）

やどりせし花橘もかれなくなどほととぎすこゑたえ
ぬらむ（一五五番）

郭公我とはなしに卯花のうき世中になきわたるらむ
（一六四番）

ゆきふりて人もかよはぬみちなれやあとはかもなく思
ひきゆらむ（三二九番）

わかれてふ事はいろにもあらなくに心にしみてわびし
かるらむ（三八一番）

心から花のしづくにそほちつつくひずとのみ鳥のな
くらむ（四二二番）

秋風にかきなすことのこゑにさへはかなく人のこひし
かるらむ（五八六番）

冬河のうへはこほれる我なれやしたにながれてこひわ
たるらむ（五九一番）

かねてより風にさきだつ浪なれや逢ふ事なきにまだき
立つらむ（六二七番）

しるといへば枕だにせでねしものをちりならぬなのそ
らにたつらむ（六七六番）

あまのすむさとのしるべにあらなくに怨みむとのみ人
のいふらむ（七二七番）

ふるさとにあらぬものからわがために人の心のあれて
見ゆらむ（七四一番）

おほぞらはこひしき人のかたみかは物思ふごとになが
めらるらむ（七四三番）

雲もなくなぎたるあさの我なれやいとはれてのみ世を
ばへぬらむ（七五三番）

山の井の浅き心もおもはぬに影ばかりのみ人の見ゆら
む（七六四番）

秋風は身をわけてしもふかなくに人の心のそらになる
らむ（七八七番）

秋の田のいねてふ事もかけなくに何をうしとか人のか
るらむ（八〇三番）

松尾聡『古文解釈のための国文法入門』（研究社出版、昭
和二七年一月）

九三番・七八七番

馬淵一夫「しづこなく花の散るらむ」(「平安文学研究」第一六輯、昭和九年十二月)

九三番・七八七番(松尾聡説を引く)

佐伯梅友校注『古今和歌集』(岩波書店、昭和三十三年三月)

九三番・一二〇番・一五五番・一六四番・三二九番・

三八一番・四二二番・五八六番・五九一番・六二七番・

六七六番・七二七番・七四一番・七四三番・七五三番・

七六四番・七八七番・八〇三番

保坂弘司「『らむ』の研究」(「国文学 解釈と教材の研究」

第四卷第二号、昭和三十三年十二月)

松尾聡説に従うとする

湯沢幸吉郎『文語文法詳説』(右文書院、昭和三四年一月)

具体的には解釈出来ない例を認定していない

佐伯梅友「はさみこみ」(『上代国語法研究』(大東文化大

学東洋研究所、昭和四十一年十二月)所収)

九三番・三二九番・三八一番・五九一番・六二七番

七二七番・七四三番・七五三番

阪倉篤義「中古語法の特質と解釈上の問題点」(「国文学―

―解釈と教材の研究―」第一四卷第七号、昭和四四年五

月)松尾聡説の認定を引いている

此島正年『国語助動詞の研究』(桜楓社、昭和四八年一〇月)

九三番・五八六番・七六四番

滝沢貞夫「王朝和歌にみられる「らむ」について」(佐伯

梅友博士喜寿記念国語学論集刊行会編『佐伯梅友博士喜寿

記念 国語学論集』(表現社、昭和五十一年十二月)所収)

九三番・七八七番

わがやどははりまがたにもあらなくにあかしもはてで人

のゆくらん(『拾遺和歌集』八五五番)

身はやくならの都になりにしをこひしき事のふりせざ

るらん(『拾遺和歌集』八六一番)

さかざらむ物とはなしにさくら花おもかげにのみまだき

見ゆらん(『拾遺和歌集』一〇三六番)

ともしするほぐしの松もきえななくにと山の雲のあけわた

るらん(『千載和歌集』一九七番)

なげきこる山路は人もしらなくに 我心のみつねに行ら

ん(貫之集・五五五a)(三九六頁)

わかれてふことは色にもあらなくに 心にしみてわびし

かるらん(貫之集・七二七)(三九六頁)

人めだにかれはれになるあさぢふに 月かげのみそすみてみゆらむ（大斎院前の御集・二二二）（三九六頁）

さくにこそいとゞ惜さは増りけれ みる人なしに花のちるらん（基俊集・一二）（三九六頁）

吉田五衛「かなの意に通ふらむ」（『国語国文学』第一九号、昭和五年五月）

九三番・七二七番（小沢正夫校注『日本古典文学全集 古今和歌集』を認定の下敷きにする）

坂口頼孝「ナゼを補うへらむ」私見」（『国学院雑誌』第七八巻第五号、昭和五年五月）

九三番・七八七番

種友明「『静心なく花の散るらむ』の類歌について」（『浅野信博士古稀記念国語学論叢』桜楓社、昭和五年一〇月）
収載）

九三番・七二七番（吉田氏説と同様、小沢正夫校注『日本古典文学全集 古今和歌集』を認定の下敷きにする）

今井正「疑問推量の「らむ」について」（『宇部短期大学学術報告』第一五号、昭和五年一月）

九三番・七二七番（吉田氏・種氏と同様、小沢正夫校注

『日本古典文学全集 古今和歌集』を認定の下敷きにする）

堀口和吉「『しづ心なく花の散るらむ』考」（『山邊道』第三〇号、昭和六年三月）

九三番・五八六番・七六四番・七八七番（松尾聡説・此島説を援用）

鈴木義和「『しづ心なく花のちるらむ』型の文について」（藤岡忠美編『古今和歌集連環』和泉書院、平成元年五月）

九三番・七二七番（松尾聡説を援用。他、吉田氏・種氏・今井氏の説を援用）

山田潔「『しづ心なく花のちるらむ』考」（『国学院雑誌』第九四巻第四号、平成五年四月）

九三番・三八一番・七四一番・七八七番

『古今和歌集』から最大の範囲の認定を行っているのは、佐伯梅友校注『古今和歌集』であり、『古今和歌集』を除く歌集に手を伸ばしたのは、滝沢貞夫「王朝和歌にみられる「らむ」について」だけのようである。

ここから、具体的議論についてはほぼ『古今和歌集』によって行われていたことが判る。

松尾聡『古文解釈のための国文法入門』と小沢正夫校注『日本古典文学全集 古今和歌集』（小学館、昭和四十六年四月）との認定を踏襲する結果を出している論考が複数見られる。松尾聡文献は「新説」によつては解釈が困難な例があることを指摘した文献としては管見の範囲では初めてであることが影響力の源となつたのであろう。小沢氏については、「多くの注釈書の中で小沢氏は一等「など」を使つて訳する歌が少ない」（吉田五衛「かなの意に通ふらむ」〔『国語国文学』第一九号、昭和五十一年五月〕五八頁）と指摘されることもあり、その訳文が語法学史上しばしば援用されたようである。

五、「解釈が困難な例がある」という批判について

「解釈が困難な例がある」という批判に対し、「新説」側から一応ある程度の回答はしていると思える記述が、松尾捨治郎『助動詞の研究 自他の対応を中心として』（文学社、昭和一八年二月）中に見えるので、以下に引く。

此は若干趣が違つて、らむを用ゐた本文の方は、疑問体とも説明体とも考へられる。

池神 力士儼可母 白鷺乃 杵喙持而 飛渡良武
(同三八三二)……………85

此のかもは、其処で一旦結ばれた者とも見られ、又下に係つて行く者とも見られる。(一八七頁)

「それ故あんなに……持つて飛んで行くのであらうよ」と、(乙)(四)の説明体に解すべきであらう。(一八七頁)

之に似た用例を古今集に求めると、次の如き者が六首ある。

我が如く 物や悲しき 時鳥 時ぞともなく 夜
たゞ鳴くらむ……………86

附属句―の下にさればにやが含蓄されて居ると見れば、本文の方も疑問体の(乙)(四)となり、さればが含蓄されて居ると見れば、本文の方は説明体の(乙)(四)となる。(一八八頁)

「我が如く物や悲しき。」と終止している文を原因条件句とするために、「さればにや」または「されば」を「含蓄されて居ると見」るとすれば、例えば複数文で構成されており、助動詞「らむ」で終止する文中に助動詞「らむ」の

「焦点」が見いだせないものであっても、「焦点」を求めることが出来ると説明するものである。

本稿は「新説」を主張するものでも擁護するものでもなく、そもそもその構えも準備もないものであるが、右の観点を斟酌して考えれば、「四」で示したような例については、解釈出来るとの考えが松尾捨治郎にはあったのだろう。

見たところ、「新説」を批判する文献は、疑問副詞を補う解釈を退けることを批判することに比べると、この部分に対する注目は少ないようである。

そして、些か風変わりな現象もある。佐伯梅友校注『古今和歌集』（岩波書店、昭和三三年三月）や、堀口和吉「しづ心なく花の散るらむ」考（「山邊道」第三〇号、昭和六一年三月）などに、その現象は見える。

佐伯氏は、「新説」の具体的な論者論考を挙げていないが、「など」を補わないで解釈する説を批判しながら、

昔べや今も恋しき[△]ほととぎすふる里にしもなき
て来つらむ（一六三）

人に見ることや苦しき[△]をみなへし秋ぎりにのみ
たち隠るらむ（二三五）

逢坂のゆふつけ鳥もわがごとく人や恋しき[△]ねの
みなくらむ（五三六）

秋の野の草のたもとか 花すすき[△]ほにいでて招
く袖と見ゆらむ（二四三）

これらは、上との関係で、「さてや」「さればや」などの語を補って解しているということも、今まで考えて来たところからおして納得がいくのではあるまいか。

（四二頁）

と言う。松尾捨治郎の「86」として提示する例と構造の共通する例を多く提示している。また、「さればや」と「さればにや」の間の隔たりはさほど無いであろう。

堀口氏の場合は

(D) その心の表現の中には、(C)の表現であってその原因句の部分を省略しているという形の表現もある。そのばあい、一見人が表されているかのようにも見える。

この用法のうち、ただ「ソレデ」が省略された「昔へや」などの類は、古くからそう理解されていたようである。（八七頁）

池神の力士舞かも白鷺の杵啄ひ持ちて飛びわたるらむ（万葉・三八三）も同じ類である。⑧に「ここに〈らむ〉が用いられるのは、この助動詞が、〈池神の……飛びわたる〉という不確実な事実に対して作用するからであって（P5）」とあるが、不確実性は、前文を含めるからではなくて、前文を受けて「ソレデ」という表現と解するところから成立するはずである。

（八八頁）

と述べている。堀口氏は佐伯氏と異なり松尾捨治郎の両論考を参照していることを明示しているが、上掲の『助動詞の研究 自他の対応を中心として』に見える部分には触れていない。「池神の」の例は「85」として見えており、また、「ソレデ」は「されば」であろう。

こうしたことは各氏の論を揺るがすものではなかろうが、不思議なことである。結果として「新説」の全部を批判しきれていない、あるいは、それと意図せずに「新説」の一部を増広したようなものになっている。

「新説」が正しいとは言わないが、批判する側が「新説」を主張する論考よりも狭く捉えて批判していたというよう

なことがあったとすれば、不思議なことである。

ところで話を松尾捨治郎の解説に戻すと、こうした解説を示されると今度は、「さればにやが含蓄されて居ると見」たり「さればが含蓄されて居ると見」たりすると、「旧説」的に疑問副詞的な疑問が「含蓄されて居ると見」るのと、一体いかほどの懸隔があると考えているのか、考えあぐんでしまう。「新説」などと呼ぶ必要があったのかどうか、この論議立て自体に意味があったのだろうかと思ってしまうほどに。

文章中明示されている内容を「されば」と原因理由にする条件文を構成すると見るか、疑問副詞により疑問の不定条件文を構成すると見るかの相違となってくるようである。元々出発点が同じ文であり、その解釈をどう説明するかの間隔から端を発するので、理筋が近づいても不思議ではないが、事ここに至ると、「新説」と「旧説」との間隔は驚くほど接近してくる。

六、おわりに

本稿では『古今和歌集』第八四番歌を代表的例とする助動詞「らむ」の語法をめぐって交わされていた議論の中から、語法研究を行うにあたっては今となってはあまり顧みる必要もないと思う、松尾捨治郎の所説について取り上げてみた。長らく加えられてきた批判説から、松尾捨治郎説では解釈が困難な例があるという批判を取り上げ、該当例とされたことのある用例をまとめ、批判論が見落としがちである、松尾捨治郎説の示す解釈説の一面を取り上げた。

結果として、この批判論は松尾聡『古文解釈のための国文法入門』が初めと思われ、また、小沢正夫校注『日本古典文学全集 古今和歌集』の解釈がそれなりに重要な手がかりとなっている場合があることを窺うことが出来た。また、批判論と松尾捨治郎説が、二文構成の歌について、文と文とが文脈的に原因理由条件句を構成していて、助動詞「らむ」の推量の内容を助動詞「らむ」で終止する文ではなく別の文の中に求めることが出来るといった、似通ったことを述べていることがあることを確かめた。

研究史が何故このような仕儀に至ったのか本稿では確かめなかったが、松尾捨治郎の所説に見えるこの点について批判論が着目した上での批判展開が早くに一般化していたら、所詮はものの述べ方の問題かもしれないが、研究史はもう少し違った展開をしたように感じる。

本稿のように、今日ではあまり重要性を感じられていない学説に対する過去の議論を取り立てることは、実際の語法を研究することに比べ、意味のない議論とされるだろう。しかし、私事だが、「実際の語法」を研究するために生み出された沢山の論考を先行研究として理解しなければならぬ立場としては、研究史の見取り図を作ることにも或る時には嘲弄されながら、一方で「実際の語法」研究の試行錯誤の結果だけが脳天気積み重ねられることに、非常に迷惑しており不愉快に感じている。

本稿を取っ掛かりとして、今後とも語法学説史についてを考えていきたいと考えている。